

エリザベス・ギaskell (1810-65) の生涯

エリザベス・ステューブソンは、1810年、ユニテリアン派の元牧師の末娘として、ロンドンに生まれた。1歳で母を亡くすと、マンチェスター近郊の田舎町ナッツフォードに住む母方の伯母に引き取られた。父の再婚によって生じた継母や異母姉妹との気まずい関係や、ただ一人の兄や父を相次いで亡くす不幸に苦しむことはあったが、概してロンドンのチェルシー地区に現存する生家平穏な幼少、青年期であった。21歳で同派の牧師ウィリアム・ギaskellと結婚してマンチェスターに移り住むと、よき妻よ



ヒースウェイト(ナッツフォード):
育った家



ブリマス・グローヴ(マンチェスター):
主な作品はこの家で書かれた。
現在はギaskell記念館。



ローン(ホリボーン、ハンブシャ):
この家で亡くなった。



ナッツフォードのブルック・ストリート・チャペル内の墓地に、夫や娘たちとともに今も静かに眠る。



19歳の肖像画

き母として家庭を支えた。「いつもにこやかで穏やかでいらっしゃるから、回りにいる者はみな性格の一番善い面が出てしまう」とは、夫の生徒による夫人の印象である。34歳の時授かった長男を9ヶ月で病死させることがなかったら、作家エリザベス・ギaskellが誕生することはなかったら。悲しみを癒すために書いた『メアリ・バートン』が、出版4ヶ月にして3刷りが出るほどの好評を博したのである。彼女は一躍文壇に認められ、以降、英文学史に名を残す作家たちと交わることになる。「あなたの創作力は、少なくとも千一夜は続くに違いない」と書いて、彼女をシェヘラザードにたとえたチャールズ・ディケンズ。互いの人格と文学を尊敬しあい、自宅を訪ねあったシャーロット・ブロンテ。そして、「私の人生観や芸術観は、『メアリ・バートン』の作者のそれと似た部分がある」と告白したジョージ・エリオット、等々。ギaskellは、その後17年間に、長編小説『ルース』『北と南』『シルヴィアの恋人たち』をはじめ、『クラフフォード』『従妹フィリス』などを含む約40におよぶ中・短編小説、および伝記『シャーロット・ブロンテの生涯』を著す。今日私たちがブロンテ姉妹を知るの、この伝記によるところが大きい。長編『妻たちと娘たち』の完成を目前に控えた1865年秋、ハムプシャに買った別荘で急逝。55年の生涯に幕を閉じた。



54歳頃



「日本ギaskell協会」は、エリザベス・ギaskellの人と文学を研究し、その魅力をわが国に広く普及させるため、1988年に設立されました。2018年4月現在約100名の会員がいます。毎年10月第1土曜日に大会を、奇数月第2日曜14.00-16.00にオンライン読書会を、開いています。大会や幹事会の様子は、上の写真のとおりです。学術的であると同時に、和気藹々とした会です。ご入会を歓迎します。

〒102-8357 東京都千代田区三番町12 大妻女子大学文学部英語英文学科 早川友里子研究室内

日本ギaskell協会事務局

PHONE: 03-5275-8070

E-MAIL: yurikohayakawa@otsuma.ac.jp

HOME PAGE: <http://www.gaskell.jp/>

日本ギaskell協会

エリザベス・ギaskell を知っていますか？



いつまでも残るものは、信仰と希望と愛です。
その中で一番すぐれているものは愛です。

(1 コリント 13:13)

『メアリ・バートン』 (1848)

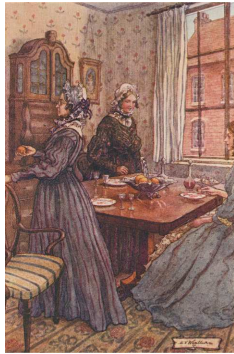
1834-40年のマンチェスタを舞台に、工場主の息子ハリー・カースンを殺害するに至った労働者ジョン・バートンの愁苦と、ハリーを捨て幼なじみのジェム・ウィルソンを選ぶ彼の娘メアリ・バートンの恋路を軸に、労働者階級の日常を克明に描いた作品。殺人犯の嫌疑をかけられたジェムを救うためにメアリが証人探しをするくだりの冒険小説なみの迫力もさることながら、注目すべきは、ジョンとエスタという二人の罪人の描写に投影された、作者の人間愛である。冷酷な工場主たちへの



ハリーを殺害するための
くじを引くバートン

見せしめという大義名分も、息子を失った苦痛を切々と訴える父親の前では、何の意味も持たない—そのことを知ったジョンは、慚愧と自責の念に苛まれながら死んでいく。私生児となった娘を救うために春をひさいだエスタは、更生させようとするジェムの優しさを拒み、別れのキスをしようとするメアリを突き放して、自己の罪の重圧に泣く。そのような二人を、読者は知らず知らずのうちに赦している。

『クランフォード』 (1853)



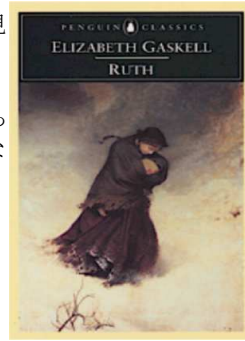
デボラ、マティ、そして
語り手のメアリ

ギヤスケルの故郷ナッツフォードをモデルにした架空の町クランフォードを舞台に、この田舎町に生きる人びとの日常を淡々と描く。一見平凡な暮らしの中にも、大小さまざまな事件は起こり、それらについての人々の反応が、時には滑稽に、時には哀感を込めて描かれる。近隣の都市に住むメアリが、クランフォードにあるデボラ、マティの中年姉妹の家に滞在し、そこで見聞きしたことを語る形で、物語は進行する。作品の基底を流れる精神は、弱者へのいたわりと道徳的高潔さである。

『ルース』 (1853)

16歳のルースが恋人ベリンガムに捨てられた時、お腹の中には赤ちゃんがいた。そうとは知らずに、彼女を保護した牧師ベンソンとその姉。世間体を気にして動揺する姉に、ベンソンは言う、「この子はルースを更生させるために送られた神の使いだ」。8年後、未亡人を装い、息子を育て、ささやかな平穏を得ていた

ルースの前に、自分を捨てた男が現れる。ベリンガムの求婚を彼女が拒否したのは、彼との間に、魂の深さにおいて、大きな隔たりを感じたからだ。やがて彼女の過去が明らかになり、真実を隠していたことを責められたベンソンは、「ルースのような女性には、贖いの機会が与えられるべき」と言明する。犯した罪は同じなのに、なぜ社会は男には寛容で女には冷酷なのか。人間の偽善を告発し、ルースの心の気高さを謳う。



ペンギン版の表紙より

『北と南』 (1854-55)



マーガレットとジョン
(BBC映画より)

牧師を辞めた父に伴ってイングランド北部の工業都市ミルトンにやってきたヘイルー家。マーガレットの、青年工場主ジョン・ソーントンとの交わりは、こうしてはじまる。労働者ヒギンズとも知り合った彼女は、おのずと労資対立の仲介役を務めることになる。専制的なジョンに、「神様はお互いに助け合うように人間をお造りになったはず」と反論するマーガレット。そんな彼女を彼は次第に愛するようになる。社会問題と二人の恋愛が平行して物語は進む。ジョンの恋の行方は最後の最後まで分からない。

『シャーロット・ブロンテの生涯』 (1857)

ギヤスケル(39)がシャーロット・ブロンテ(34)と知り合ってから5年足らずで、シャーロットは病死する。父ブロンテ師の依頼を受けたあと、ギヤスケルは精力的に『ジェイン・エア』の作者の足跡をたどり、1年8ヶ月でこの伝記を書き上げた。「シャーロットが、勇敢に、かつ信仰に堅く立って、試練を耐えとおしたことを描写する」と、ギヤスケルは彼女の親友に語り、原稿を読んだその人は、「シャーロットの生涯と性格が正確に記されている」と述べた。



ブロンテ牧師館
(ハウス)

『シルヴィアの恋人たち』 (1863)

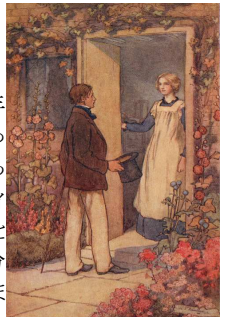


シルヴィア、チャーリー、
そしてフィリップ

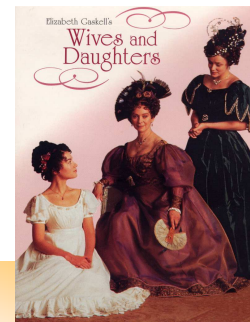
物語は、18世紀末のイギリスの漁港モンクスヘイヴンを舞台に、酪農家の娘シルヴィアと、彼女を真摯に愛する洋品店の店員フィリップ、そして、彼の恋敵でシルヴィアと婚約する捕鯨船の鉾打ちチャーリー、の三人を軸に、フィリップを密かに慕うヘスタを絡めて、展開する。シルヴィアを得るためなら14年でも待つ覚悟のフィリップ。彼の想いは、果たしてシルヴィアにとどくのか。報われない愛に耐えるヘスタの人生はどうなるのか。「愛が真実なら、けっして絶えることはない」—全編を流れる波の永遠性に絡めて、そんなメッセージが聞こえてくる。

『従妹フィリス』 (1863-64)

思春期の少女の淡い恋は、相手の青年の旅立ちとともに、深い悲しみへと変わっていく。失恋の痛手からいつまでも立ち直れないでいるフィリスを、召使いベティが一喝する、「みんなができるだけのことをしました。お医者様も、神様も。ご自分でも何とかかなさなければ罰が当たります。わたしなら、手に入らないものはさっさと諦めて、父や母にいつまでも心配をかけるようなことはしません」・・・。フィリスは、やっと前を向いて歩き出す。



フィリスと、語り手ポール



モリー、シンシア、そしてハイ
アシンス(BBC映画より)

『妻たちと娘たち』 (1866)

父の再婚により、新しい母ハイアシンスとその娘シンシアと同居することになったモリー・ギブスン。価値観の違いにとまどいながらも、彼女は新たに姉妹ができたことを喜んでいく。ハイアシンスは近所に住む由緒あるハムリー家の兄弟にシンシアを嫁がせようとする。次男のロジャーがシンシアに魅せられ、彼女に求婚する。2年間英国を離れることになっていた彼は、彼女を束縛しないために、婚約の公表を控えた。そんなロジャーの誠実さに、コケティッシュなシンシアは似合わない。心を痛めるモリーは、彼を密かに愛していた。